

奈良県立奈良図書館の電子図書館事業の取組

1 はじめに

奈良県では、新県立図書館の整備に向けて95年3月に「奈良県立図書館整備基本構想」が策定された。その際に、インターネット時代の到来を見越し、情報受・発信の場として図書館を位置づけた。

さらに、00年7月には新図書館が目指す新しい図書館サービスとそれを支える情報システムや施設計画を中心に「新県立図書館（総合情報センター）整備計画」を取りまとめた。

当館では上記に基づいて電子図書館事業に取り組んでいる。

本稿では、当館のホームページの事例に沿って取り組みを紹介する。

2 事業概要

当館の取り組みとして、97年2月にホームページを立ち上げ、95年から蓄積してきた書誌データベースを利用したOPACや当館の利用案内などの情報をインターネットを介して発信してきた。また、試験的に電子メールによるレファレンスの受付を行ってきた。現在は、これらに加えて、デジタル化した絵図の公開、所蔵資料の貸出予約などを行っている。

3 事業内容

(1) OPAC提供について

当館では、95年4月から5ヵ年計画で所蔵資料の目録情報を入力する事業が始まった。

書誌データの作成にあたり、現在の国立情報学研究所（NII）が提供するオンライン共同分担目録方式による全国規模の総合目録データベース（図書/雑誌）システムのNACSS-CATに参加した。これにより02年8月末現在、図書等36万6千件のデータが利用者や他館に供されている。

(2) 電子メールレファレンスについて
電子メールでのレファレンスの利点は、次のとおりである。

受付時間が柔軟である。また、利用者からの質問内容が正確に把握でき、それに対して的確に対応できる。加えて質問も回答もデジタル化されているので、これを加工して参考事務の事例集として蓄積が可能である。

当館は、電子メールによるレファレンスを24時間受け付けている。レファレンスの担当職員は、質問内容を吟味し、2～3日の内に調査し、電子メールで回答している。ただし、回答に長期間を要する場合は、その旨を電子メールで質問者に通知している。

最近では、ホームページ上でレファレンスを受ける館が増えてきているが、郷土関係ならびに一般的な質問内容の場合は、その地域の利用者のみ限定して受付を行っているところがほとんどである。当館では質問内容などを限定せずに受付をしている。

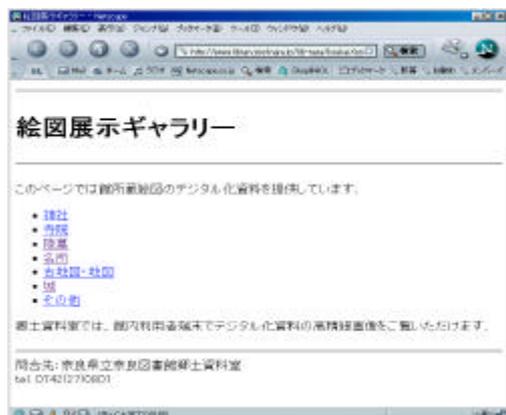
そのためか開設当初は学生や大学関係者が多かったのに対して、最近では、当館に直接来館されている利用者からの問い合わせも多くなっている。また、奈良県関係の質問が多いと想定していたのに対し、一般的な質問内容が多いことがわかった。

(3) 郷土資料のデジタル化について

当館では、Webのコンテンツとして「絵図展示ギャラリー」がある。ここでは、当館所蔵の絵図をデジタル画像化したものを“神社”、“寺院”、“名所”などカテゴリー別に紹介している(図1)。絵図は各カテゴリー内で、表題と画像をサムネイル表示している(図2)。各画像を選ぶことにより拡大画像と解題が表示される(図3)。

画像のフォーマットをJPEGにするなど外部からアクセスしてもストレスを感じさせないように配慮している。

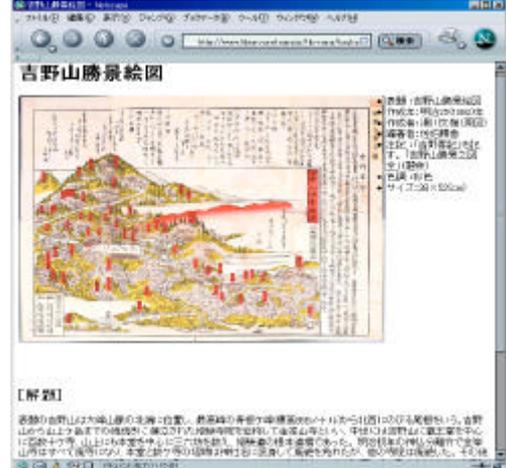
(図 1)



(図 2)



(図 3)



もう一つのWebコンテンツとして、「公文書目録データベース」が挙げられる。当館

では、明治期から昭和初期にかけての奈良県の行政文書ならびに明治から大正にかけての奈良県下の郡役所文書が所蔵されている。ここでは、公文書と当館所蔵の郷土関係の古文書・絵図の目録情報が検索できる。

公文書は、97年から書誌情報の作成を行い、この事業は、現在も継続して行っている。また、これらの目録情報は、当館のオリジナルであり、前出のNACSIS-CATへのデータベースには登録していない。

資料のデジタル化は、一次資料の保存と二次資料の活用という面から不可欠だと考えられる。特に公文書の書誌情報の公開は、意義があると自負している。

(4) 貸出予約について

当館では00年6月1日よりネットワークによる貸出予約サービスを行っている。予約をかけるにはID番号とパスワードが必要になるため、当館では「利用者カード申込書」に電子メールアドレスを記載された場合、サービスの必要有無を確認し、必要とされる場合には、職員が仮のパスワードを設定し、後日、利用者がパスワードを変更できるようにしている。その後、利用者は、当館ホームページ上から貸出中の資料を予約することができる。当館では、貸出の利用状況はリアルタイムで反映している。

予約された資料が返却されたときは、当館から予約者に自動的に電子メールで通知する。

このように広く「ネットワークを活用したサービス」が利用されるに至り、コンピュータウイルスなどの攻撃にもさらされるようになってきた。

当館では、コンピュータシステムのセキュリティレベルを維持するとともに、職員が最新の情報とセキュリティ意識を持ち、ウイルス感染などを未然に防ぐ努力をしている。

そのため、社団法人日本ネットワークインフォメーションセンター (JPNIC) が主催する

研修会や奈良先端科学技術大学院大学の開催するセミナーなどに参加している。

4 今後の取り組み

今後の課題としては、図書館のWebページのポータルサイト化に向けての整備である。昨今のインターネットの普及と利用者のニーズの多様化に対応し、利用者が情報収集の窓口として利用しやすいようにカテゴリーごとに整理していく。

また、県内公共図書館間で行っている相互貸借システムが定着してきたことに伴い、県内図書館の蔵書を横断的に検索する仕組みの必要性が増してきた。そのため、今年度システム構築に着手し、12月初旬には県内10図書館（県立1、市立5、町立4）の横断検索が実現する。

私たちは、これからも利用者および地域の図書館の要望を反映しつつ、より良いサービスを構築していきたいと考えている。

網野町立あみの図書館(京都府)における電子図書館化に向けてのささやかな取組

1 図書館の概要

(1) 網野町

本町は、京都府の北部、丹後半島の西の玄関口、日本標準時子午線最北に位置し、面積75?、人口16,000人余りの小さな町である。古くから「丹後ちりめん」に代表される織物業を基幹産業として発展してきたが、近年は美しい自然や歴史・文化的遺産を活かした交流産業おこしを目指している。

(2) あみの図書館

丹後地方(6町)で2番目にできた公共図書館として、本年7月19日に開館した。以前は、「網野町生涯学習センター図書室(90㎡)」で、蔵書約2万冊、職員1.5名でのサービスであった。

新しい図書館は、複合施設『ら・ぽーと』の2階にあり、1階は町の保健・医療・福祉行政部門、社会福祉協議会・デイサービスセンターなどの福祉機関などからなる「網野町健康福祉センター」である。

図書館の延床面積は約1,140㎡。610㎡の開架室(5万冊収蔵可)の他に、閉架室(3万冊収蔵可)集会室、研修室、情報創作室などを備えている。

職員は、非常勤の館長、2名の町職員、4名の臨時職員(週29時間)。蔵書は、4万冊でスタートした。

(3) 運営上の重点

図書館運営上で特に重視しているのは次の3点である。

複合施設の特徴を活かし、多世代の交流の場となるように、また、福祉との連携を深めて利用者層の拡大に努める。

IT時代の情報拠点・学習拠点として、幅広くきめ細かなサービスの実現を目指す。

みんなで作る図書館として、ボランティ

アをはじめとして多くの町民の力を結集する。

この中から今回は「に絞り、歩みだしたばかりの「小さな町でのささやかな情報化の取組み」を報告する。

2 町長部局との連携

準備段階で、月2回の建設会議に平行して、図書館、教育委員会、情報システム課からなる情報化に向けての検討会議を積み重ねてきた。図書館の情報化については町の情報ネットワークの一環として位置付けられていたため、会議は町長部局の「情報システム課(7名構成)」が中心で進められた。

開館してからも、機器やシステム上のトラブルに即座に対応してもらえる体制が確立している。

3 情報化への環境

「教育情報ネットワーク整備事業」や「まちづくり情報ネットワーク整備事業」などにより、町内全小・中学校、町内行政関係施設が光ファイバーで結ばれている。また、図書館開架室の床はOAフロアになっている。

設置されている主なOA機器は次の通りである。

カウンター及び事務室

- ・図書サーバー(Webサーバーは役場)
- ・パソコン7台
- ・プリンター2台
- ・バーコードリーダー2台
- ・ハンディタイプ2台

開架室

- ・タッチパネルOPACパソコン2台
- ・利用者パソコン(インターネット用)

15台

情報創作室

- ・IT作業用パソコン5台
- ・スキャナ3台
- ・プリンター1台
- ・デジタルカメラ3台
- ・デジタルビデオカメラ1台
- ・講習会用ノートパソコン22台

4 インターネットの活用

(1) 設置台数と設置場所

所蔵資料の検索には館内にタッチパネル OPAC が 2 台あり検索した資料の所在する書架番号も表示される。また、利用者が自由に使えるパソコン 15 台は、館内 3 箇所に分け、隔離されたコーナーではなく書架の近くに閲覧テーブルと同じような感覚で設置しており、図書館のホームページから資料の検索、予約もできる。

(2) 意義と利用上の規則

今やインターネットは重要なメディアであり、公共の機関である図書館においてすべての利用者に提供することは大きな意義があると考えられる。図書資料は利用者の範囲を町内に住、在勤、在学と限定しているが、インターネットについては申請すれば誰でも利用できることとした。しかし、図書館における利用者へのインターネット提供はあくまでも「情報の検索」が目的であるため、以下の規則によって利用を制限している。

- 1 利用料は無料とする。
- 2 利用時間はひとり 1 回、1 時間以内とする。
1 日に 1 回に限り再利用できるが、利用者多数の場合は初めて利用する人を優先する。
1 時間が経過すると、パソコンの電源は自動的に切断される。
- 3 WEB 上のチャットサイト、各種フリーメールなどは利用しないこと。
- 4 パソコン内に各種ファイルの保存はしないこと。
- 5 パソコンの設定をむやみに変更しないこと。
- 6 WEB からのソフトウェア等のダウンロードはしないこと。
- 7 FD 等記録媒体に情報を保存して持ち帰ることはしないこと。
- 8 プリントアウトサービスは利用できない。

(3) 管理方法

利用制限時間を管理するためにカウンターにある図書システムのパソコンで集中的に電源を ON・OFF できる、1 時間で自動的にシャットダウンする、また個別にメッセージを送ることができるように設定されている。

「有害情報」への対策としては、コンテンツフィルタリングは導入しているが、あらゆる有害サイトをブロックできるものではない。また、オンラインゲームやメールについては禁止している。

(4) 利用状況

オープン時間が夏休みと重なったこともあり、約 2 ヶ月は 15 台がフル稼働し、利用の予約が必要であった。現在も週末は利用が多い。利用者層は幼児から 70 代の高齢者まで幅広いが小中学生が 70% を占める。

5 図書館のホームページ

(1) 公開の時期と内容

平成 14 年 7 月 19 日オープンと同時に公開した。地域の中の図書館として網野町のネットワークの中に位置付け、図書館の紹介の他、新着図書や期間別の人気書籍の紹介、所蔵資料の検索からのインターネット予約を可能にした。また、メールを使い利用者の声を収集できるようにした。

(<http://www.amino-town.jp/library/> を参照のこと)

(2) 制作のねらいと工夫

資料の検索システムなどの関係から立ち上げは業者に委託したが、内容やイメージについては職員と協議を重ねて制作した。「親しみやすく、使えるホームページ」をめざして、ロゴやキャラクターを採用するなどの工夫をし、検索機能についてはより便利に使えるよう現在も改良を重ねている。また、図書館カレンダーや掲示板については、複数の図書館職員が研修し、行事の様子を写真で紹介するなど、情報を発信している。

6 京都府図書館総合目録ネットワーク

現在、京都府では京都府立図書館と市町村立図書館等の図書データを合わせた京都府図書館総合目録ネットワークシステム（K-Libnet）という府内総合目録データベースが構築されている。これによって府内の図書館の資料を検索することができ、自館にない資料も相互貸借を通じて利用者に提供することができる。

データ提供館とデータ検索館、さらに未参加館の3タイプに分かれており、あみの図書館は現在、データ検索館である。データ提供館として参加できるよう現在準備中である。

7 情報創作室

(1) 設置目的

町内公的機関、外郭団体等が保有する情報をデジタル化し、インターネットを通して発信することを支援し、団体や町民の活動を活性化させると共に、町民の情報処理能力を向上させ、人材育成に役立てることを目的としている。

(2) 管理・運営

図書館、教育委員会、情報システム課が共同で管理・運営をしている。

「3」であげた機器を調べ、IT講習会を企画・運営したり、登録団体がホームページ作成に自由に使用できるようにしている。

8 利用者への支援と職員の研修

(1) IT講習会の開催

町民の情報処理能力の育成と向上に向けて、年齢、能力などに応じて次のような講座を繰り返し行っている。

- ・パソコン入門
- ・ワード
- ・エクセル
- ・インターネット
- ・ホームページ作成
- ・図書検索
- ・情報検索

(2) ITボランティアの活動

図書館ボランティアとして、「よみきかせ」「BOOK」「IT」の三部門がある。ITボラン

ティアは、タッチパネルでの図書検索、インターネットでの情報検索などで困っている人への指導・援助に活躍している。

(3) 職員の研修

開館に向けての規則や制限づくりと合わせて、各種機器やシステムについての研修をしてきた。又、インターネットによる情報検索の仕方の実技研修も行った。

臨時職員の割合が多く研修機会が持ちにくい、月に一日は全員揃っての研修日を設定している。

9 今後の課題

歩み始めたばかりで問題点・課題も十分整理出来ていないが、今後取り組みたいこと、さらに充実させたいことを列挙する。

郷土資料など貴重書のデジタル化
(網野町誌は出来ている。)

図書館職員の研修

・IT時代における図書館のあり方

・情報処理技能の向上

利用者の情報処理能力の育成・支援

(特に、高齢者、女性、障害者)

ITボランティアの養成

IT時代の情報モラルの確立

利用者の状況に対応した規定の見直し

他館データ検索の拡充

・京都府図書館総合目録ネットワークへのデータ提供館としての参加

・国立国会図書館総合目録ネットワークへの参加、遠隔利用サービスの活用

利用者の声を活かした、より良い図書館システムの構築

以上の課題を考えたり、実施する場合には、「図書館情報化の意義」「誰のために、何のために必要なのか」など、常に原点に振り返りながら取り組んでいきたい。

岡山県立図書館の電子図書館ネットワーク構想 - Dublin Core と Z39.50 を標準的技術基盤として -

1 はじめに

岡山県総合文化センターでは、2004 年秋の新県立図書館開館に向け、「デジタル岡山大百科」と名付けた電子図書館ネットワーク構想を立てている。本稿では、まず従来の電子図書館システムの問題を踏まえた上で、問題克服を目指して取り組む当館の構想を紹介する。

2 従来の電子図書館システムの問題 標準化に対する取り組みの遅れ

Dublin Core(「ダブリンコア」と呼ばれる)や Z39.50(「ゼットサンキュウテンゴウゼロ(マル)」,「ゼットサンジュウキュウテンゴジュウ」等と呼ばれる)と言っても、初耳の方が多いのではないだろうか。どちらもインターネットのような巨大情報空間での情報資源探索のために打ち出された標準規格で、欧米では急速に定着している。

一方、わが国の公共図書館では、標準化について、これまでほとんど注意が払われてこなかった、と言っても過言ではない。これは、次の3つの理由によると考えられる。第1に、コンピュータシステムに向けられる職員の関心の多くが、外部と隔絶された館内業務システムの機能や使いやすさで占められていたこと。第2に、インターネット公開される現在の電子図書館システム(OPAC(オンライン閲覧目録)を含む)は、あくまで自己完結的、縦割り構造的なレベルに止まり、他システムとの連携、情報共有等のレベルに到達していないこと。第3に、標準化推進機関が国内に存在せず、ユーザ、ベンダーともに様子見、あるいは中途半端な対応に終始していること。

しかしながら、オープンなネットワークのインターネット時代に、インターネット公開

された電子図書館システムが独自仕様というのは、決定的な弱点となる。つまり、異なるシステム同士の連携ごとに、解析、翻訳、変換等の作業が必要となる。具体的に OPAC を横断検索する分散型の総合目録ネットワークの仕組みについて、国内と欧米主要諸国の状況を比較すると対照的である。国内では、OPAC ごとにシステムエンジニアが個別解析しプログラム作成する方式が多い。これに対し、欧米主要諸国では、汎用的横断検索ルールの Z39.50 に準拠した標準的なシステムが構築されるので、ユーザ(図書館職員)が自由に設定できる。さらに特筆すべきは、個人ユーザが設定できるクライアントソフトまで無料配布されていることである。欧米では、主導権はあくまでユーザ側にある。

以上のように、コストパフォーマンス、ユーザの利便性等の点で、標準化の効用は明らかである。今後は、インターネット環境での標準的技術基盤に立脚したシステム間連携を前提に、機能や使いやすさを考えるべきである。このような問題意識に立ち、当館の構想を紹介する。

3 デジタル岡山大百科の3つの機能

これまで、岡山県総合文化センターは、全国有数のインターネット基盤である岡山情報ハイウェイの分散環境を可能な限り活用した情報発信方法を工夫してきた。たとえば、総合目録ネットワークのデータベース管理システムとして、各館の OPAC を横断検索する分散型の形態を採用している。

「デジタル岡山大百科」の試みは、総合目録ネットワークを機能の1つに盛り込みつつ、県民がインターネットに接続したパソコンで郷土岡山の姿を百科事典的に見られること、調査研究できることを目標としたもので、さらに2つの機能が追加される。

1つは、「レファレンスデータベース」であり、レファレンスの回答事例集を検索し、自

分自身で答が出せる仕組みを用意する。

もう1つが、「郷土情報ネットワーク」である。郷土に関するWebページや、音声、動画等のデジタルコンテンツを一括検索、内容表示するシステムである。

前記の総合目録ネットワークが、資料の目録情報の確認に止まるのに対し、「郷土情報ネットワーク」では、著作権の制約を受けない資料について本文内容まで確認できる。対象資料には、図書館所蔵の古文書、絵図、自治体発行行政資料等がある。収録データにはほかに、郷土新聞記事索引、郷土雑誌記事索引、郷土映像データ等がある。

4 Dublin Core と Z39.50 への準拠

郷土情報ネットワークを、システムの側面から考えると、複数の電子図書館がデータベースサーバに蓄積する二次情報のメタデータを横断検索、一括検索し、一次情報の郷土デジタルコンテンツを提供するシステムと捉えられる。

メタデータとは、データに関して記述した、構造化されたデータのことである。もっとも身近な具体例として「目録」が挙げられる。

メタデータには、電子商取引を対象とした Indecs、教育関係資料を対象とした IEEE-LOM、行政情報所在案内を対象とした GILS 等、さらにそれらを包含する最大公約数的性格を持つものに、Dublin Core がある。こうしたメタデータのうち何を採用し、メタデータを横断検索する手法として何を採用するかが問題となる。

まず、メタデータについては、その作成基準として今もっとも標準に近いとされる Dublin Core を採用する。15 項目の要素で構成されており、初心者でも容易に入力できるような単純な要素構成である(図1)。今後、県民にもインターネット上での情報提供、登録を呼びかけることを考えると、こうした単純な要素構成は望ましい。これらの要素で、インターネット上の情報資源について、分野を超えて記述していく。



登録コソメアツク	http://www2.biglobe.ne.jp/~minwa/ryoushi/ryoushi.html
直供コソメアツク	
タイトル	運の良い猟師 // ウノノヨイリョウシ
著者名	
主題-キーワード	民話 // 童話 // [NDC]001
内容	よく知られているお話「かもとりごんべえ(罾取り権兵衛)」と同種類の昔話です。響猿語(おまげさに語られる話)で、語るほどに大きくなっていったようです。外国でもドイツに「ほろふき男爵の冒険」のようなよく似たお話があります。ほろふき話とわかっていても愉快で楽しいお話です。
公開者-出版者	河田 則子 // カワタ ノリコ
関与者	河田 則子 // カワタ ノリコ
日付	[作成日]2101-07-15
	Text

図 1. Dublin Core に準拠したメタデータ記述の例

次に、メタデータのデータベースを横断検索する手法としてZ39.50を採用する。Z39.50は、情報検索の際の情報のやりとりのルール、データ通信の約束事を定義した国際標準規格である。まずアメリカの国内規格となり、次にISOの規格になり、さらにJISの規格にもなっている。Z39.50はDublin Coreのほか、目録をも検索対象としているので「デジタル岡山大百科」全体の統合検索も可能になる。国内の大学図書館では既に、システムの調達基準としてZ39.50を必須要件とするところが多くなっている。主要ベンダーもZ39.50に準拠した電子図書館システムを提供しつつある。

以上の取り組みは、YAHOO、Google等のWeb検索エンジンに任せれば良い、との反論があるかもしれない。しかし、Web検索エンジンには、次の3つの問題がある。検索基準が大雑把で、タイトル、主題、発信者等の項目別検索ができない。データベース内の個別データを検索対象としない。家庭や学校での閲覧に相応しくない内容、品質のページも検索対象となる。

5 図書館以外の組織，県民との連携

図書館間の連携ばかりでなく、他の組織、県民との連携も望まれる。

自治体の行政情報に関しては、パートナーシップの結びやすさという点から、Webページ作成担当者に直接登録してもらうことが考えられる。自治体情報を取り込むことは実用情報を取り込むことであり、非常に大きな鍵であると考えられる。電子図書館は、電子政府あるいは電子自治体の中で捉える努力を行っていかねばならないのではないかと。そうした位置付けを図書館として行っていかないと、今後図書館は生き残れないのではないだろうか。これまで、社会の中での図書館のあり方や位置付けは、かなり試みられてきた。しかし、政府や自治体の中での図書館の位置

付けというのは意外と行われていない。

県民との連携の具体的方法は検討中であるが、データ提供について、県民に特派員委嘱する参加型の形態を考えている。

6 世界を視野に入れたデザイン

岡山県に限らず、全国的に郷土情報についてこうした仕組みを作っていく、標準的技術基盤としてZ39.50やDublin Coreを採用していけば、個人ユーザが全国の郷土情報を一括検索できるようになる。たとえば岡山の備前焼、石川の九谷焼、愛知の瀬戸焼等、「陶芸」を検索キーにして横断検索したときに、品質がある程度保持された一次情報を取り出すことができる。さらに、学校の総合学習でも安心して使える。

国内に限らない。日本情報の海外への提供不足が指摘されて久しい中、世界の日本研究者にとっても、国際標準規格に準拠したサイトが次々と立ち上がる意義は大きい。

参考文献

- 1) 森山光良「分散型総合目録ネットワークの分類と評価 図書館ネットワークの発展段階と標準化過程におけるZ39.50の位置付け」『図書館雑誌』Vol.95.No.8, 2001.8, p.554-557.
- 2) 森山光良「Z39.50とDublin Coreを用いた郷土関係電子図書館ネットワークの構築 『デジタル岡山大百科』における構想と課題」『デジタル図書館』No.21, 2001.11, p.3-18.
http://www.DL.ulis.ac.jp/DLjournal/No_21/1-moriyama/1-moriyama.html
- 3) 森山光良「総合目録ネットワークの現状と今後の展望 異館種連携による統合的な電子図書館ネットワークの実現に向けて」『図書館雑誌』Vol.96.No.3, 2002.3, p.167-170.

出雲市立図書情報センター（島根県）における電子図書館化の現状と課題

本施設は平成13年4月から、IT時代に対応した情報提供機能をもたせるために、名称を出雲市立図書館から出雲市立図書情報センターへと変更した。これは、従来の図書だけでなく、インターネットや電子媒体などの電子メディアによる情報の提供や活用をするためである。

1 電子図書館化の現状

(1) インターネットによる情報発信

平成12年3月から、ホームページを開設し、蔵書検索ができるようにするとともに、電子メールによる予約を受け付けるようにした。

蔵書検索は、貸出情報をほぼリアルタイムに反映するように業務サーバーとの連携をとっている。

検索画面からの予約については、パスワードの管理と予約業務が煩雑になることが考えられ見送った。そのかわり、電子メールによる予約を受け付けるようにした。

ホームページの内容は当初は、蔵書検索、利用案内等であったが、新刊図書紹介、展示図書紹介、各テーマ本の紹介、イベントの報告等を掲載し、より情報を充実してきた。

しかし更新及び作成のために人手がかかり、現体制では内容の充実がなかなかできないのが現状である。

今後の課題として、単に資料の紹介だけではなく、ホームページが利用者の情報収集の手助けとなるようなツールとしての機能を備えるかである。例えば、郷土資料などについて、体系的に索引を作り、図書だけでなく、古文書も含めた資料を検索できるような機能が求められるようになるのではないかと考える。

(2) 利用者用インターネットパソコン

平成13年度6台のインターネット用パソコンを設置し利用者には開放している。IT時代となり、パソコンに触れる機会がなかった利用者にも気

軽に使える環境を整備した。利用は1人1回30分で利用できる。このパソコンは市が平成13年度に整備した地域イントラネット「いずも未来ネット」に接続されている。この「いずも未来ネット」は市役所と市内の公共施設を1.5Mbpsの高速通信回線で結び、インターネットにも接続されている。

利用状況は1日概ね70人の利用がある。多い場合は予約待ちとなる。

また、このパソコンには、CD-ROM版の百科事典がインストールされている。

最近では、自分のノートパソコンを持ち込み使用したという希望もあり、将来的には、利用者のパソコンを館内LANに接続したり、あるいは、ホットスポット等の無線LANサービスも検討する必要がある。

(3) IT講習会

本図書情報センターは平成13年度から本市のIT講習拠点のひとつとなり、講習用パソコンを20台備えたITルームを設けた。初心者講習から、さらに上級者対象の講習会が開催されている。この講習会や利用者用インターネットパソコンと併せ本図書情報センターでは、パソコンに触れ学ぶ機会を提供している。

(4) 外部データベースの提供

従来は図書館に所蔵する資料の提供だけであったが、インターネットの発達により、所蔵していない情報資料へのアクセスも重要となってきた。そこで、平成13年度から、次の有料データベースを提供している。

新聞全文検索サービス

官報情報検索サービス

この他、市のホームページから議会議事録検索、例規集の検索ができる。これらの情報は、紙媒体でも提供しているが、検索性や省スペース性に優れており、今後この分野の充実が求められる。

(5) 写真資料のデジタル化

電子図書館の機能として、資料をデジタル化し保存することがある。

平成14年度、本図書情報センターに所蔵している貴重な写真資料を長期的に確実な保存を行うためにデジタル化し、CD-ROMに記録保存する事業を実施しており、年度中に完成予定である。対象資料は明治から昭和までの本市に関する写真及びネガである。

このデジタルデータはWEB形式で、年代別・分野別、50音別等の索引を作成して検索しやすいようにする。そして、本図書情報センターのパソコンでの検索だけでなく、「いずも未来ネット」のサーバーにも保存してイントラネット内の施設からも広く閲覧できるようにする。さらに、インターネットでも公開する予定である。

また、デジタル化については、解像度を印刷物の使用にも可能な高解像度とWEB等の一般公開用の低解像度の2種類とする。

貴重な資料をデジタル化し、ネットワークを通じて閲覧できることで郷土についての調査・研究に役立つことが期待される。

2 電子図書館化の課題

電子図書館がITを活用し情報提供をする機能とすれば、現時点ではある程度の要件を満たしているといえる。本図書情報センターが今後電子図書館としてさらに充実していくためには次の事項があげられる。

- (1) 外部データベースやCD-ROM等の電子媒体の充実
- (2) 利用者用パソコンの台数増やLANへの接続サービス等の検討
- (3) 情報ボランティア等の育成
- (4) 所蔵資料のデジタル化

今後の課題としては、ひとつには電子図書館の目指すところをどう具体的に描くかである。今後、IT時代に対応した技術はある程度取り入れていくことができそれなりの対応はできるが、技術の進歩が早いいため技術動向を見極めながら施策を立案するのが難しい。政策立案能力とそのための人材が求められる。

もうひとつは、IT時代に対応した職員の養成である。従来の図書と電子資料を統合的に利用者に提供するにはやはり職員の資質が問われるのではないか。IT時代になってツールが変わっても、情報を収集・整理・保存し利用者に適切かつタイムリーに提供することは変わらない。そのためには、職員が従来培ってきた司書としての能力を生かしながら、デジタルツールを使いこなす能力を高める必要があるといえる。

岡山市立図書館（岡山県）における電子図書館化の現状・計画・構想

1 はじめに

岡山市立図書館では平成9年度より岡山市立図書館情報提供システム（略称：OCL-NE T）を稼働している。このOCL-NE Tはインターネットとパソコン通信を利用した蔵書検索システムを中心としたシステムである。

OCL-NE Tは、導入から既に5年を経過しており、システムの更新時期を迎えているが、種々の事情によりレベルアップは平成16年度を予定している。

長く使ったシステムではあるが、当館ではOCL-NE Tを活用して、様々なサービスを考え、展開してきたつもりである。

このシステムの導入経過、活用の実態を報告し、今後の計画についても触れたい。

2 岡山市立図書館情報提供システム（OCL-NE T）の現状

(1) 導入経過

平成9年12月にまずパソコン通信を利用して蔵書検索ができるシステムを導入した。

導入に当たっては、数年間に渡る検討を行った。検討の際、最も重視したのは利用されるシステム、利用者にとって使いやすいシステムとは何かということであった。

ビデオテックスを利用したキャプテンシステム、インターネット、パソコン通信が選択肢として検討された。当時最も現実的とされたキャプテンシステムは街頭端末としての利用に留まっており、図書館としては将来性に不安を感じた。インターネットはWindows95の登場で一気に身近な存在になったが、プロバイダへの加入が必須で、まだその利用料金は割高であった。また、OCL-NE Tの利用対象は岡山市民であり、世界的な広がりを持つインターネットへの公開の意義は、当時は

さほど見いだせなかった。

それに対してパソコン通信は商用のサービスも拡大しており、家庭や個人に急速に浸透しつつあった。パソコン通信であれば、対象者である岡山市民はパソコンとモデム、電話回線があれば時間に制約されることなく、市内通話料金で岡山市立図書館の蔵書検索が利用可能である。将来性と利用者の負担を考えて、パソコン通信による蔵書検索システムの採用を決定した。

パソコン通信のプロトコルとしては、従来からあるテキストベースを主体とした無手順のパソコン通信とともに、将来のインターネットへの公開を考慮して、PPP接続の3本立てでサービスを開始することにした。

蔵書検索システムのエンジンはレスポンスに優れたシステムの採用を最優先した。当時は、通信環境も悪く、通信速度の遅さを補うには、検索速度の速い検索エンジンの採用が不可欠であった。検討の結果、山口県立図書館がパソコン通信に採用していた平和情報センターのFuture Happinessが検索速度が速く、実用にも耐えられると判断した。また、当館の図書館のオンライン業務システムにはない検索結果の並べ替えや漢字検索、検索履歴を利用した複合検索機能等を有していたことも採用の決め手になった。

PPP接続の画面についても、通信環境を考え、画面がすぐ表示されるように淡い色を基調とし、写真や絵を使わないシンプルな画面構成とした。

平成10年11月からはインターネットによるサービスも開始し、現在はインターネット、PPPと無手順によるパソコン通信の3本立てでサービスを行っている。また、平成12年度には岡山県図書館横断検索システムにも参加した。OCL-NE Tの利用は年々増え続け、14年度に入ってからには月に6千件を超えるアクセスもある。そのほとんどが、インターネットからのアクセスで、わ

ずか数年の間にインターネットがパソコン通信に取って代わることになった。

年 度	アクセス件数
平成 10 年度	24,393件
平成 11 年度	42,049件
平成 12 年度	50,855件
平成 13 年度	59,861件

(2) 情報提供手段としての役割

OCL-NETを稼働した当初、蔵書検索の他には、利用案内、購入雑誌・新聞一覧と移動図書館のサービスポイント程度しか、図書館からの情報を提供していなかった。インターネットに公開してからは、アクセス件数も増え、蔵書検索に加えて情報提供の役割も果たすようになる。

図書館行事や展示会のお知らせはもちろんのこと、新着資料の紹介やテーマごとに資料の紹介も定期的に行っている。移動図書館のサービスポイントも岡山市の情報政策課が作成した「おかやま施設情報マップ」の地図上から確認できるようにした。また、印刷すればかなりの量になる岡山市の図書館整備実施計画に関する報告も公開している。発信する情報が多くなり、更新に要する職員の作業は大変だが、今や情報提供の手段として欠くことのできない存在になっている。

(3) 雑誌・新聞リンク集の作成

当館のリンク集の特徴は、地元の図書館のホームページ等へのリンク集の他に、当館が購入している雑誌や新聞のホームページへのリンク集を作成していることである。

雑誌や新聞は、蔵書検索の対象となっていないため、当館が所蔵する雑誌の一覧を作成する必要があった。

当初は一覧だけを公開していたが、タイトルの一覧だけではその雑誌がどんな内容の雑誌かわからない。そこでインターネットの利点であるリンク機能を活用し、雑誌や新聞を発行する出版社のホームページへリンクを貼り、その内容がわかるように工夫した。雑誌

の最新情報だけでなく、バックナンバーの内容がわかるホームページもあり、利用者からの問い合わせの際に重宝している。ただ、ホームページアドレスの変更も多く、維持はかなり大変である。

また、当館ではデータを入力せずに書庫に保存している雑誌も多数存在している。これを徐々に追加・修正したものが、現在公開している保存雑誌一覧である。これによって、利用者だけでなく、職員さえ書庫に所蔵していることすら知らなかった雑誌の存在を知ることになった。この一覧を見て資料請求してくる利用者や図書館もある。

(4) 郷土資料の電子化

平成13年度より岡山市情報政策課の協力を得て、郷土資料のうち、絵画や掛け軸等の貴重資料のデジタル化を進めている。現在13点の絵画や掛け軸をインターネット上で公開している。これによって今までなかなか市民の目に触れることのなかった貴重な資料が間接的にはあるが、一般に公開できるようになった。今後も郷土の貴重資料を中心にデジタル化を進めていく予定である。

(5) メールを活用

OCL-NETにはメール機能がなく、岡山市立図書館としてのメールアドレスは所有していなかった。平成12年度に岡山市役所に庁内LANが整備され、職員にパソコンが支給された。その際各課にもメールアドレスが付与された。

これを機に、メールによるレファレンスサービスと、今まで、主に電話連絡のみだった予約資料が用意できた時の利用者への連絡をメールで始めた。

メールによるレファレンス件数はほとんどない。一方予約資料が用意できた時の図書館から利用者への連絡は、携帯電話の普及と相まって送信数はかなり多い。1回に複数の利用者にまとめてメールが送信できるため、電話連絡に要していたコストと時間がかなり

軽減されている。

3 今後の計画・構想

(1) 画面構成の変更

平成9年にトップページを作成して以来、画面の基本は変更していないため、後進の図書館のホームページに較べてかなりシンプルである。

16年度のレベルアップ時に画面構成についても検討することになる。高齢者や障害者に配慮し、メニュー構成がわかりやすく親しみやすい画面にすると同時に、音声読み上げソフトにも対応できる画面構成にしたい。

また、携帯電話からの蔵書検索や情報提供も検討課題となっている。

(2) 予約への対応

現在のOCL-NETでは資料の予約はできない。次期システムでは、インターネットからの予約受付について検討することになるが、課題も多い。

当館の予約は非常に多く岡山市の図書館の特徴にもなっている。平成13年度岡山市立図書館全館の予約は32万件、中央図書館だけで10万7千件にのぼる予約があり、その処理のための残業も多い。インターネットからの予約は、読みたい本を確実に提供するという本来の予約とは異なり、利用者が来館しないで予約を行うため、書棚に在庫のものを職員が利用者の代わりに取り置くサービスとなりかねない懸念もある。予約の多さも含め、こういった課題を整理しつつ、さらなる予約業務の増加に見合った自動化を取り入れるなど、工夫が不可欠である。インターネットから図書館業務系への予約入力、連絡メールの送信の自動化など、既に他の図書館で実現している技術も視野に入れて検討していきたい。

(3) 資料情報の提供

現在でも新着資料の紹介等はホームページを通じて行っているが、他の図書館でも利用者が求める資料情報をメールなどで個別に提

供する方向が検討されているが、当館でも研究を進めていきたい。

(4) さいごに

図書館の基本である資料提供を積極的に進めるために、OCL-NETを利用して、今後も積極的に図書館から情報を発信していきたい。特に県立図書館をはじめ、他の図書館と連携・協力して、資料情報のデータの提供や公開が進んでおり、各図書館の資料提供能力と整備が逆にますます求められてきている。岡山県では新県立図書館建設に向けて資料整備も進んでおり、最近ではバックアップ体制もしっかりしていて非常に助かっている。またレファレンスデータの共有など様々な連携が県を中心に進みつつあり、当館としても積極的に関与していきたい。

さいごに新聞社等の有料のデータベースが、次第に定額制に移行してきており、それについても、利用されるデータベースを見極めながら積極的に活用できる環境を整え、図書館サービスの向上に生かしていきたいと考えている。

高知県立図書館における電子図書館化の現状

1 高知県図書館ネットワークの基本方針

(1) 図書館の情報化及びネットワークの必要性

平成 11 年度、コンピュータシステムが当館に導入され、平成 12 年 4 月 1 日より、カウンターでの貸出し返却業務、来館者の蔵書検索、インターネットやイントラネット（高知県情報スーパーハイウェイ）からの蔵書検索など、図書館業務及びサービスがコンピュータ化された。

これによって県立図書館に対し、県内の市町村立図書館の支援や県民サービスの向上が一層期待されており、県内図書館のネットワーク化を進める段階を迎えていた。

(2) ネットワーク化の視点

図書館の情報化、ネットワーク化は以下の 3 つの視点で今後の重要テーマと位置付けられる。

情報公開

県立図書館をはじめ、公共図書館がもつ図書館資料等の所蔵情報は住民への情報公開の一環として積極的にコンピュータ化し、公開する。

ネットワーク化による相互連携とサービスの向上

県立図書館を中心に県内の公共図書館、公民館図書館をはじめ、大学、専門図書館など、館種や行政区域の枠を越えた情報ネットワークを構築することで、相互の連携とサービスの高度化、多様化を図り、市町村立図書館の支援や県民サービスの向上を図る。

生涯学習の情報化・IT化の支援

図書館ネットワークの構築を通じて、県民の情報リテラシーの向上、生涯学習機会の提供による地域住民のデジタルデバインド（情報格差）是正を推進する。

2 「高知県図書館横断検索システム」

(1) 事業概要

高知県と 7 市町が連携し、公立図書館、公民館及び学校等の公共施設等をネットワーク化し、県立図書館及び市町村立図書館等の所蔵資料データの一括検索、結果の一覧表示機能を備えた図書館ネットワークシステムのサービスを提供する。

(2) 主な内容

県立図書館にセンターサーバ、情報入出力端末及び利用者用公開端末を、市町村立図書館に図書館システムサーバ、Web サーバ、情報入出力端末及び利用者用公開端末を、役場ロビー、公民館、学校等に児童生徒・住民が利用できるイントラネット接続端末を設置し、次のようなサービスを提供する。

また、家庭・事業所等からインターネットを通じて利用することもできる。

共通検索システム

公共図書館等の図書館情報を一括して検索、結果表示するシステムによる全県的な図書館ネットワークシステム（共通検索システム）

県、市町村の行政の枠を越えた広域連携事業として図書館サービスを提供。各図書館の図書・資料の所蔵情報データを相互に抽出し、住民に対して一覧表示する。

(3) 事業の概略

ア 事業実施団体

- ・ 高知県 ・高知市 ・土佐清水市
- ・ 田野町 ・香我美町 ・野市町
- ・ 伊野町 ・宿毛市

イ その他

- ・ 国立高知大学
- ・ 高知工科大学

(4) 共通検索システム



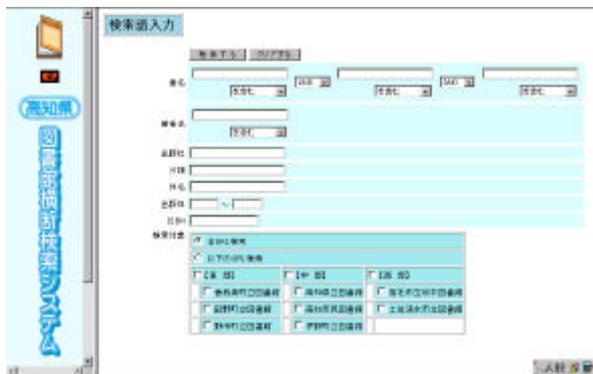
ア 県立図書館トップページ

左側に「(県立図書館)文献検索」ボタンと「高知県図書館横断検索システム」ボタンがある



イ 「高知県図書館横断検索システム」トップページ

中央のボタンを押して検索画面に入る



ウ 検索条件入力画面

下のラジオボタンを利用することで、検索す

る館を選ぶことができる。



エ 検索結果（全体一覧）



オ 検索結果（香我美町立図書館）

検索結果は全体一覧と各館ごと、それぞれ表示することが可能

3 図書館ネットワークの今後

(1) ネットワークの拡充

未加入の市町村立図書館の他、大学、県立施設等、専門性の高い図書資料情報も共有すべく、現在連携を検討している。

(2) 相互貸借の見直し

現在は市町村との物流は郵送でまかなっているが、検索システムの周知に伴う相互貸借量の増加に対応するために、協力車の活用など、現在とは異なった方法も検討している。

熊本県立図書館におけるインターネットを活用した電子図書館サービスの実践と課題

1 はじめに

当館では、平成13年4月の新図書館システム稼働をきっかけとしてインターネットを活用した図書館サービスを開始した。稼働から1年半を経過した今、改めて事例と課題を本稿で整理をした。

2 館内サービス

館内サービスとしては、館内各フロアに合計7台の利用者用パソコンを新システム導入時に設置した。このパソコンでは以下の機能を持たせている。

(1) サービス内容

ア 電子資料の閲覧

7台の内4台は100連装のDVD-ROMチェンジャーと接続し、所蔵する電子資料(別表1)の閲覧に供している。

イ ホームページの閲覧

専用線(開始当時は1.5Mbps、現在3Mbps)を引いたため利用者が気軽にインターネット閲覧ができる環境を整えることができた。

ウ 利用規則

明文化したものは作成していないが、利用申し込みをしてもらい、1回につき30分以内で利用していただいている。電子資料の場合はプリントアウトを認めている(1枚20円)が、ホームページのプリントアウトは認めていない。また、フロッピディスク等へのダウンロード及び個人のソフトウェア利用(ワープロや表計算など)も認めていない。

(2) 問題点

ア 利用支援の問題

まず、利用者層は初心者から熟練者まで多様である。熟練者の場合問題はほとんどないのだが、初心者の場合マウス操作からキーボード操作まで支援を求められることもある。一方、図書館員は

カウンターでの利用者への対応に追われているのが現状で十分に利用支援ができる状況ではない。

当館ではCD-ROMとDVD-ROMを収集しているが、操作マニュアルのほとんどはその資料のインストールと起動・終了の手順しか記載されていないため、実際にどう扱うかはその資料の「オンラインヘルプ」に頼るしかない。オンラインヘルプの使い勝手は決して良いものとは言えない。この点は、各開発元に工夫してもらえない。

また、図書館員も、普段から検索方法などの操作に精通しておく必要があるが、それぞれソフト固有の操作方法があるため、すべての職員にそれを求めるのも困難なところがある。しかし、基礎的な情報リテラシーを身につけることは必要と思われ、職員研修の実施や職員の取り組む姿勢を高めることが課題である。

イ ホームページの閲覧規制

ホームページ閲覧は、興味の赴くままに情報を検索する「ネットサーフィン」ではなく図書館資料を補うための情報入手手段の一つと考えている。従って、掲示板への投稿やショッピング、電子メール(フリーメールやチャットも含む)の利用も認めていない。この点は利用者や図書館の認識のずれがややあるようだ。

フィルタリングソフトによる一部サイトの閲覧規制も行っている。これは、利用者だけでなく図書館員も不必要にいろいろなサイト閲覧をしないために実施している。しかし、フィルタリングによる利用者への閲覧規制については資料提供や知る自由の観点からなど様々な視点から今後も議論が必要であると考えている。

ウ 機器の管理について

利用者用のパソコンはWindows98(SE)で運用しているが、システムの安全を確保するため次のような対策を取った。

(ア) キーボードの機能キーの一部を無効

キーボードの「ALT」や「ウインドウズ」キーを物理的に機能しないように改造。

(イ) フロッピドライブを無効

保守以外ではフロッピディスクは使用しないため、通常は使えないようにシステムを変更した。

(ウ) メニュー画面によるデスクトップ表示の抑制

パソコンを起動すると、「コンテンツメニュー」を表示するようになっており、不必要なパソコン操作をされないように、特別なキー操作をしないと終了することができないよう設定している。

平成14年度からはさらに、自動バックアップソフトを組み込み、毎日開館前に自動的にハードディスクの中を元に戻す(ある時点の状態に戻す)ようにしたため、システムファイルの削除などのいたずらをされても自動的に復元するようになった。

(3) 課題

ア 有料データベースの利用

CD-ROMによる新聞記事検索を利用していたが、有料データベースに切り替えを行う。これで、新聞記事検索が容易にできるようになる。しかし、予算の都合上、複数端末の同時アクセスができない。また、新聞記事以外にもレファレンスツールとして便利なデータベースが多数存在している。これらを利用するための予算化(増額要求)も必要と考えている。

一方、家庭でもインターネット用の高速回線が定額で利用できるようになった中で、図書館がインターネット環境だけを提供するのではなく、有用なデータベースを無料もしくは低額で提供することも、今後図書館の役割の一つとして求められてくると思われる。その場合、料金徴収の是非も議論が必要だが、有料の場合、確実に手軽な料金徴収方法の確立が待たれるところである。

イ 端末台数の問題

特に、土・日や夏休みなどには、予約待ちも出てくる。また、設置場所によっては稼働率が低いときもあり、端末の配置や台数についても今後検討が必要である。(別表2)

3 ホームページを利用した館外サービス

一般県民向けサービスと図書館等へ向けてのサービスの2通りがある。本稿は、県民向けサービスを取り上げることにする。

(1) 蔵書検索

熊本県内の公共図書館では初めての取組となった。

館内業務やOPAC、帳票業務など複数のサーバがあり、それぞれのデータベースの同期を頻繁にとると各業務のレスポンスの低下を招くため、資料の動態や予約受付は行っていない。資料の最新動態を表示することは、利用者に親切と思われるので、改善が望まれる。

(2) 電子メールによるレファレンス

当館ホームページからレファレンスの受付を行っている。

内容は、所蔵照会のように軽易なものから、古文書の内容に関する複雑なものまで様々である。

中には、館内の端末からレファレンスを依頼しているケースも見られた。

(3) 携帯電話サービス

携帯電話から、蔵書検索及び利用案内の提供を行っている。

4 まとめ

当館で行っているインターネットサービスは公共図書館では標準的なものになりつつある。始まって間もないため、解決すべき点も多い。また、「インターネット活用」の観点では十分に活用しているとは言えない。

当館では、県内図書館の先進的取組として、貴重資料のデジタルアーカイブや県内図書館等との総合目録システムの構築、障害者等からの貸出受付、宅配サービスなど、インターネットの特色を生かしたサービスの構築に向けて検討している。

<別表1 電子資料一覧>

Super 日本語大辞典	インプレス130万語大辞典
スーパーニッポニカ2002	スーパー大辞林
マイクロソフトブックシェルフ	家庭の医学事典
花図鑑 Vol. 1 ~ 3	岩波生物学事典第4版
岩波日本史事典	岩波平和ミュージアム
岩波理化学事典第5版	五味太郎言葉図鑑うごきのことば
今日ものんびり熊本市電	最新医学大事典第2版
全国方言資料	世界国勢図会2001/02
星の降る夜 Leonids2001	大宅壮一雑誌記事索引1992-1999
群書類従	朝日現代用語知恵蔵2000
日本国勢図会2001/02	判例 master
民力2001	理科年表2001
朝日新聞戦後見出しデータベース 1945 - 1999	マルチメディア図鑑 はたらく自動車 魚類 恐竜 犬 昆虫 自動車 植物 蝶 哺乳類 鳥類 鉄道 熱帯魚

(平成14年9月末現在)

<別表2 端末利用状況平成13年度>
(回)

	1F	2F	3F	計	1日平均
4月	7	239	65	311	28.3
5月	29	722	200	951	39.6
6月	14	770	256	1040	41.6
7月	41	753	257	1051	43.8
8月	140	1067	356	1563	60.1
9月	49	831	285	1165	50.7
10月	47	807	269	1123	44.9
11月	23	731	196	950	39.6
12月	18	607	156	781	35.5
1月	30	659	144	833	37.9
2月	17	721	194	932	40.5
3月	63	836	188	1087	41.8
総計	478	8743	2566	11787	
端末台数	1	4	2	7	

篠栗町立図書館（福岡県）における 電子図書館化の現状 ～利用者とはみにつづける図書館～

1 はじめに

本町は、市街地の三方を山々で囲まれ、豊かな緑とともに篠栗四国霊場などの観光資源に恵まれた自然環境を有している。また、福岡市の東側至近に位置し、JR篠栗線の電化などにより福岡市との結びつきが一層強まりをみせる中、人口は増加を続け、平成14年8月には3万人を突破し、住宅都市としての様相を呈している。

JR篠栗駅周辺は、町役場をはじめクリエイト篠栗、町立図書館、オアシス篠栗などの公共施設が集まり、多くの人々が訪れる町の玄関口となっている。また、旧篠栗街道沿いは、水路と一体となり昔ながらのたたずまいを残している。

図書館は平成5年4月に開館し、平成12年5月には貸出冊数100万冊になった。蔵書、貸出冊数も年々増加し、平成13年度には10万冊の蔵書を有し、年間貸出冊数は約24万冊、月平均2万冊である。

2 IT図書館にむけて

図書館をとりまく状況は多様化し、情報の提供が占める割合は大きく、又、日進月歩で変わり続けてもいる。よって図書館では、CD-ROM（各種電子書籍）の閲覧サービスやインターネット閲覧サービス・インターネットによる図書情報提供（図書館蔵書検索）サービスを利用者の為にはじめた。

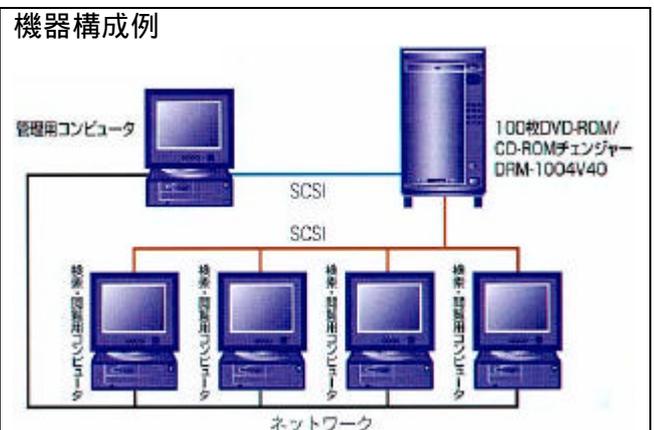
以下に、それぞれのサービスを行うのに必要としたコンピュータや概要を紹介する。

(1) CD-ROM閲覧サービス

CD-ROM閲覧サービス（ギャラリーシステム）は、利用者が図書館に蔵書している多くのCD-ROMソフトを簡単に探して利

用できるもので、当図書館では、利用できる端末（以下パソコン）を2台、管理用に1台のパソコンを設置している。

CD-ROMソフトは、コンピュータ室に設置してあるCD-ROM100枚チェンジャーに納めてあり、各パソコンとのネットワーク接続で利用できるようになっている。利用者は、パソコンに表示してあるメニュー画面から自分の見たいソフトを選ぶだけでソフトの自動再生が始まる。音声を聞く場合は、ヘッドホンを使用する。



(2) インターネット閲覧サービス

インターネット閲覧サービスは、おもに利用者へのレファレンスサービスの一環としてはじめたもので、閲覧できるパソコンはCD-ROM閲覧で使用しているパソコンと兼用で1台となる。事務室のパソコンでも同様にインターネットの閲覧ができるようにしている。また、インターネットの接続回線は、専用線を利用し、将来の通信利用拡大を見据えて光ケーブルの配線をしている(QTNet)。

各パソコンには、コンピュータウイルスの駆除や侵入検知ソフトを導入しており、日々最新ウイルス情報の自動更新がインターネットを通じてできるようにしている。また利用者が使用する端末には、インターネット上でレファレンス情報としてふさわしくない情報の掲載されているホームページの閲覧を防ぐ

ために、フィルタリングソフトも導入している。

インターネット閲覧サービスは、館内で30分間無料提供している。利用者の反応もおおむねよく、特に若者のIT学習の場になりつつあり、図書館の若年層の来館の誘い水的な要素になっている。

(3) 図書館蔵書検索

インターネット図書情報提供（図書館蔵書検索）は、図書館のホームページを公開し蔵書の図書を自宅や学校などからインターネットで「あるか・ないか」探することができるサービスである。

情報提供用Webサーバは運用上、図書館内の設置や管理は難しいため、図書館システムの納入業者に設置・管理を委託している。検索は、書名、著者名、出版社、出版年、ISBNの各書誌情報はもちろん、あいまい検索やうろおぼえ検索にも対応している。図書館に新しく入れた本の案内も行っている。

日常生活の中に、インターネットから多様で大量の情報が簡単に入手できるが、その情報が正確で求める情報であるか否かを判断するのはとても難しい。今日の図書館は、それをいかに整理し、提供するかという情報提供の水先案内人の役割が大きく、ますます専門知識が求められる。

ITの時代において、図書館はそれをいかに取り込み、活用するかが重要であるが、それ以上にソフト面の工夫や心配りが大切である。資料収集・提供業務、情報提供業務に偏りがちだが、混沌として目標を見出し難くなっている今日、図書館運営も見直しが必要とされている。町立図書館では、世の中のニーズや住民の要求に応じられる様、町の特性に応じた運営方針を住民に毎年開示している。ちなみに、平成14年度の事業予定は「文化と安らぎの図書館をめざして」である。

3 平成14年度の事業予定

(1) 子育て支援

「子どもの読書活動の推進に関する法律」の施行に伴い、下記のことを心がける。

読書活動は子どもが言葉を学び、感性を磨き、表現力を高め、想像力を豊かなものにし、人生をより深く生きる力を身に付けていく上で欠くことのできないものであることにかんがみ、図書館においても積極的に資料の提供等を心がける。

ア 分校への本の出前貸出

当町には1校の分校があり、図書館までの距離が約10kmに及び、図書館利用がしづらい環境である。児童（小学生）7名に、また地域の住民にも併せて提供できればと計画している。

イ 学校図書館とのネットワーク

小・中学校の図書館の電算ネットワーク化を推進し、資料の貸借、相談等の依頼について対応し、学校教育へ積極的に支援する。

ウ 出前講座

依頼のあった幼稚園、保育園（無認可保育園も含む）小中学校でブックトークやお話会を行う。

エ 本のわくわく探検事業

本年度は県の事業である青少年アンビシャス運動の中の「本のわくわく探検事業」に取り組んでいる。

子ども達を取り巻く生活環境等が大きく変化し、子ども達の読書離れが指摘されている中、豊かな感性や情操を育むための読書の有用性を理解することにより、学校を中心とした子ども達の読書活動の活性化を図ることを目的としている。

幼稚園、小学校、中学校へ朝の読書の時間にボランティアや図書館職員を派遣した結果、子ども達が以前より本を身近に感じだした。

中学校においては、5行作文に取り組むきっかけになっており、おおむね良い方向にあると思われる。11月7日に研修会を開催し、それぞれの取り組みを報告する計画である。

オ 週5日制支援

「土・日曜日は図書館がおもしろい」として、毎週土曜・日曜に行事を催している。

カ 「やさしい郷土史」の作成

小中学生対象のわかりやすい郷土史を作り、郷土を知り、郷土を愛する子どもの育成に努める。

(2) “みんなで考えよう”

「町長と“わ”になって語ろう」等の講座を定期的で開催し、町民と行政の距離を縮め、開かれた図書館づくりを目指す。

この会は「緑のトラスト運動」「心に残った一冊」「どうなる我が町」などをテーマに町長と町民が同一目線で語り合う2時間である。

(3) 展示・企画

「企画」を充実させ、世の中のニーズに対応し、常に情報の最先端を担う図書館づくりを目指す。

図書館に足を運んで下さる利用者に夢やうらおい等を少しだけでも提供できればと、週ごと企画、月ごと企画、季節企画に分け、館内に変化づけをねらっている。

(4) レファレンスサービス

利用者が求める資料や情報を的確に提供し、図書館をより十分に利用できるように本や情報の探し方をサポートする。

(5) 職員の基本姿勢

職員の経験は安定したサービスを遂行できる反面、「安全」＝「停滞」に陥りやすいので、職員は常に初心に戻り、わくわくする感

性を持続させるような図書館経営に努める。

既成概念を打破し、「癒し」「子育て支援」等の心のケアの領域まで踏み込んだ図書館づくりを目指す。

(6) 障害者や高齢者等への利用サービスの強化

蔵書の宅配サービス、町内の入院患者への出前貸出業務を実施し、また増加する高齢者に対して、趣味や娯楽、大活字本の収集に留意する。

4 おわりに

今日、図書館の役目は資料の提供、情報の伝達、そして安らぎの空間の3つであり、この3つの役目が融合し、どれ1つ欠けても図書館の機能が発揮できないと考える。図書館の望ましい姿を日々追いつづけ、前進するために、全職員精進したいと感じている。